

「パンエンドスコーピー 上部消化管の検査・診断・治療」

関東通信病院副院長・消化器内科 多賀須幸男 著

山梨医科大学教授・第1内科

藤 野 雅 之

つい最近まで関東通信病院で副院長をしておられた多賀須幸男先生が「パンエンドスコーピー —上部消化管の検査・診断・治療」を医学書院から出版された。

多賀須先生は周知のごとく、食道から十二指腸まで1本で苦痛なく内視鏡検査の可能な、細径前方視内視鏡の開発・普及に心血を注がれたが、この細径内視鏡を用いて関東通信病院で行った100,000件のパンエンドスコーピー(著者は、1本の器械で食道から十二指腸球部まで一挙に行う上部消化管の内視鏡検査と定義している)の経験をもとに執筆されたのが、この本である。周到に調査・研究された内容が極めて平易な言葉で、理路整然と書かれており、たいへんわかりやすい。

目次から一部抜き出して内容を紹介すると、「I. パンエンドスコーピーの歴史と影響」から、「VIII. 治療手技」、「IX. 偶発症」までが総論的な部分である。「III. 内視鏡室」は内視鏡室のキーパーソンである内視鏡検査技師のことから、資料の整理、内視鏡・付属器具の消毒、救急

器材にいたるまで、内視鏡室の設計から運営までの諸問題を論じており、大変面白かった。

「IV. 形をよむ・色をつくる」は形態や色彩の知覚に関する認知科学の基本的な問題を論じている章である。咽頭から食道への挿入の難しさを、認知科学という斬新な観点から上下感覚・左右感覚の混乱で説明しているが、目を開かれる思いがした。

「VI. 検査の実際」は実際の手技を詳細に説明しているが、実用的なヒントがぎっしりつまっており私自身学ぶところが多かった。

次の章、「X. 下咽頭・喉頭の病気」、「XI. 食道の病気」から、「XIII. 十二指腸の病気」にいたるまで、上部消化管各部にみられる病変および代表的疾患に関する簡潔な、しかし必須な情報には漏れのない、見事な各論が続く。もちろん、それぞれパンエンドスコーピーで撮影した鮮明な内視鏡写真が豊富に添えられており、この本はパンエンドスコーピーの教科書であるのみならず、上部消化管疾患を中心とした消化器病学の優れた教科書であり、美しいアトラス

である。

この本のもう1つの魅力は、最初から最後まで多賀須先生がお一人で書かれていることである。著者の主張が示され、誠に明快である。随所に誠実なお人柄がにじみ出ており、まさに先生の聲に接するという感を抱いた。

helicobacter pylori に関してはやや冷めた書き方であるが、いわゆるAGMLの犯人で、慢性萎縮性胃炎進展の要因であることはまず間違いのないところであり、いずれ改訂の際には扱いが変わることであろう。

この本は、内視鏡に関心のあるすべての医師、co-medical staffの方に、実用的な内視鏡検査法の教科書として、同時に消化器病学の優れた教科書として、そして上部消化管の美しいアトラスとして御推薦申し上げる。

● B5 頁258 図106 写真23
原色図317 1994 定価14,420(税込)
〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)